

教員の理論と実践についての一考察

栢森和重*

A study of theory and practice in a school teacher

Kazushige Kayamori*

要旨

本研究では、対人専門職である教員の「理論と実践」はどのように関係しているのか、また、「理論と実践の往還」は教員の中で起こっているのかについて考察した。さらに、組織としての学校において「理論と実践の往還」は実現しているのか、また、その往還はどのようにおこなわれているのかを考察した。

研究手法は現職教員 5 人および、実務家教員としての筆者である「私」を対象として、個別に半構造化インタビューで聞き取りを実施し、共通質問として 6 つを掲げて語ってもらった。分析については、レコーディングしたインタビューをすべて書き起こし、文字テキストデータを作成した。次に、具体的な問いに対する答えを抽出し、その共通するものをまとめた。

これらの分析の結果、教員の中や学校においての「理論と実践の往還」の実態が明らかになった。さらに、どのようにすれば、理論と実践を往還させることができるのかを考察した。

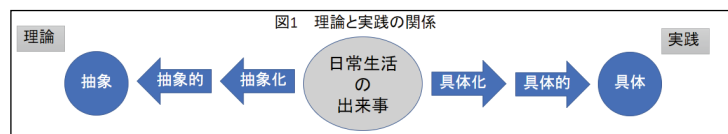
キーワード：理論と実践の往還、コミュニケーション力、具体と抽象、実践理論

1 はじめに

ショーン (2007) は「大学の知が実践的な能力やプロフェッショナルの〈わざ〉に無関心」「実践者が示す (中略) 態度のおかげで、大学と専門的職業、研究と実践、思考と行為との間の溝はますます広がることとなった。彼らは結果として知を、大学でよく見られるような、科学や学問といった『ハード』な知と、〈わざ〉や表に出ない意見などの『ソフト』な知とに二分する作業に貢献してしまう」と問題提起し、「省察的实践とは何か」で「プロフェッショナルの行為と思考」、すなわち、専門家の理論と実践の関係についてあらわした。学校においても「理論の通りにうまくいくことなどない」といわれ、大学院においては「教員の武勇伝をきいてみても仕方ない」ということをよく耳にする。武勇伝とは積んできた経験のことであるが、高等教育機関でもあり研究機関でもある大学院で理論が重んじられることや、社会の最前線でもある学校で経験や実践が大切にされることももちろんよく理解でき、むしろそれは当たり前のことと考えられる。この「うまくいくことなんてない」といわれる理論とは、「きいてみても仕方ない」と言われる教員の経験に基づいた武勇伝とは一体何なのか。また、それらはどう関係して学校や教員の中にあるのか。

《図 1》のように「理論と実践の関係」を図式化した。中村 (1992) のい

うように「決断と選択をとおして隠された現実の諸相を引き出すこと」が実践であれば、実践とは「具体」である。また、「普遍性、論理性、客観性をもつ体系的知識」が理論ならば、「抽象」である。ここでの「抽象」とは、「与えられた対象全体から、特定の性質や共通の徴表を分離し、抜き出す精神作用」(小学館 日本大百科全書より) である。そもそも「抽象」と「具体」が「融合」などするのだろうか。また、専門職としての教員の「理論と実践の往還」とはどのようなことなのか。



*三重大学大学院教育学研究科

まずは《表 1》にも挙げたが、「経験」と「実践」について整理しておきたい。「経験を積む」、「実践する」という表現はいわゆる現場においては頻繁に使われる言葉である。《表 1》にもあるように「経験」「実践」ともに主体者の意思が働いている。すなわち「能動的」である。しかしながら、

表1 理論・経験・実践について 中村雄二郎「臨床の知とは何か」をもとに筆者が作成	
理論	普遍性、論理性、客観性をもつ体系的知識
経験	出来事に出会って、＜能動的に＞、＜身体をそなえた主体として＞、＜他者からの働きかけを受けとめながら＞振舞うこと
実践	各人が身を以てする決断と選択をとおして、隠された現実の諸相を引き出すこと

現実というものは「能動的」に振る舞うと、必ずとっていいほど「他者からの働きかけによる受動＝受苦にさらされる」（中村）つまり、能動的に振舞うことによる経験は、他者や世界との関係性が組み込まれている。そのような経験をとおして現実と深くかかわっていく。他方「実践」はさらに能動的である。つまり、実践とは経験により深くかかわった現実の中から何かを引き出ししたり、見つけ出ししたり、確かめたりすることである。いずれにしても、「『経験』と『実践』とは、別々の、いわんや無関係なものではない。そうではなくて、経験の中でより能動的なもの、つまり特に意志的で、決断や選択を伴うところのものが実践だ、ということになる」（中村）このようなことを踏まえて、この文においては、「経験」「実践」という語を使用していく。

アメリカには「医者はベッドの傍らで育つ」という言葉があるようだが、では、教師はどこで育つのだろうか。教職大学院では専門職としてミドルリーダーや地域の中核的教員の育成がなされている。教育委員会は悉皆研修や研修講座を開設し、自主的な研究会や研究サークルでも研究活動がおこなわれている。しかし、「教員は学校で育つ」と佐藤（2009）はいつている。では、学校でどのように教員は育っているのか。その際の教員にとっての理論とは、実践とは何なのか。

2 研究の目的と背景

2010 年度に教職大学院が教員養成にかかわる専門職大学院として開設された。当初は 19 大学での開設であったが、令和 3 年度現在ですべての都道府県の 47 大学（3 つの連合教職大学院を含む）に設置され、私立大学を含めると 54 大学に設置されている。

専門職大学院である教職大学院は、「実践的な指導力を備えた新人教員の育成」と「現職教員を対象に、スクールリーダー（中核の中堅教員）の養成」を目的として創設されたのであるが、専門職大学院としてその修了要件に 45 単位以上習得のうち 10 単位以上は小学校等を活用した小学校等の教育に関する実習とされていることや、そのための連携協力をおこなう小学校等（連携協力校）を確保すること、実務家教員の割合を 4 割以上（小学校等の教員としての実務の経験を有する者を中心に構成）が定められた。また、三重大学教職大学院においても、その特色に「カリキュラム:理論と実践の融合・往還」や「理論と実践の融合・往還:地域教育への貢献」がうたわれている。

つまり、専門職大学院である教職大学院では、従来の研究者育成ではなく、「高度専門職業人としての教員の養成」を目的としており、その中核となるのが、学術研究の成果（理論知）と学校現場における現象（実践知）とを結びつけながら探求する「理論と実践の融合・往還」である。そのために、研究者教員に加えて、全体の 4 割以上を実務家教員とすることや、多くの実習をおこなうことが定められているのである。実務家教員には非常に高度な指導能力が期待されているが、「『実務家教員』の在り方に関して」（文部科学省）によると、実務経験を有する教員の望まれる資質として次の 3 点が挙げられている。

- 「知識や事例の豊富さ」＜コーディネーターとしての力量

- 実践経験を持つ院生たちの「事例」の相互交流・構造化のコーディネート
(上から「伝える」姿勢よりは「ともに学ぶ」・peer review 的視点を持つ人)

○「理論と実践の架橋」の体現

- how to の蓄積・skill の熟達だけではない、研究的省察のリーダー

○「教職大学院」の教育方法への精通・習熟

- 従来型の「講義」「演習」ではなく双方向型・参加型の授業運営

すなわち、高度専門職業人としての教員の養成のために、実務家教員は「事例や事例知識等をコーディネートしていく役割とともに、理論と実践の架橋を体現する者として、研究的省察を行い、リードする役割」が求められている。実務に長けた実務家教員とは一般的に優れた授業実践や学級経営、ミドルリーダーとしての学校運営等を経て、教育委員会事務局や管理職としての教育行政や学校運営・経営を経験したものとなるだろうが、研究という訓練を受けていないものが圧倒的に多いはずである。特に「理論と実践の架橋を体現する者として、研究的省察を行い、リードする」とはどのようなことなのか。そもそも学校の教員は「理論と実践の架け橋を体現」しているのか、教員の「理論と実践の往還」とは何かを明らかにすることが本研究の目的である。

3 研究方法

X教職大学院に学ぶ現職教員院生（1週間の内3日を学校現場で勤務している）4名と隣接するY県の現職教員1名、および、実務家教員としての筆者である「私」を対象として、2021年9月下旬に「私」が個別に半構造化インタビューで聞き取りを実施した。冒頭に、調査の趣旨と個人情報扱いについて、書面および口頭で説明をおこない、共通質問として次の6つを掲げて語ってもらった。

表2 インタビュー内容

1	実践として、学校（職場）がうまくいっていると感じる時のキーマンは誰ですか。
2	実践としてのキーマンはどんなタイプの人ですか。
3	実践として、学校がうまくいくために、トップ（リーダー）に必要なものはなんですか。
4	学校で困ったときや新しいことに取り組むとき、どうしますか。
5	理論と実践は往還・融合していると感じますか。それはどのようなときですか。
6	理論と実践の往還・融合を促したり、アドバイス、刺激を与えてくれるのは（学校では）誰ですか。

方法：個別に半構造化インタビュー（エスノグラフィック・インタビュー）

対象：X教職大学院に学ぶ現職教員院生A B C D 4名と隣接するY県の現職教員E 1名

日時：2021年9月下旬

当初、インタビューは20～30分程度で設定していたが、結果として30分を超え、50分近くにわたって「私」との対話を重ねた。このエスノグラフィック・インタビューをもとにこの研究においては「私」を積極的に記述する方法をとる。個人情報保護の観点から個人ごとに明示しないが、協力者5人の年代は、30歳代2人、40歳代2人、50歳代1人で性別は女性2人、男性3人である。また、校種は小学校2人（内1人は中学校勤務経験が長い）、中学校2人（内1人は小学校勤務経験がある）、高等学校1人であった。なお、本稿で個人の語りを引用する場合、性別や校種等がわかる表現等、個人特定の可能性のある表現については「○○」と記し伏せるか、文意を損なわない形に変更を施した。

分析については、協力者の同意のもとレコーディングしたインタビューをすべて書き起こし、

文字テキストデータを作成した。次に、具体的な問いに対する答えを抽出し、その共通するものをまとめた。

4 研究結果とまとめ

4-1 結果と考察

分析の結果を「インタビュー内容のまとめ・イメージ」として図1にまとめた。以下、語りを引用する場合は□で囲み、補足は（ ）で示した。

①実践をうまく回す（動かす）のは、学年主任や生徒指導主事、ベテラン教員などのミドルリーダー

「実践」がうまく回っている（進んでいる）ときのキーマンは日常的に教員のかかり近くにいる学年主任や生徒指導主事、すなわちミドルリーダーの教員だった。

生徒指導の課題が多い学校は生徒指導主事かな。そこらへんがうまくまわしていけば生徒指導主事のベテランがいるうちに若手に経験を積ませてバックアップさせるということもして、継承していかせたりもしている。（教員D）

この語りに見られるように、実践が中学校においては具体的に継承を意識しながら共有されていることがわかる。（小学校については育成や継承の意識が非常に乏しい。）

②「明るい、判断が速い、目配せができ、誰とでも話ができる」人がうまく回す（動かす）

「実践を回して（動かして）いるキーマンはどんなタイプの人ですか」という問いに対する答えである。身近なところで、一人ひとりの教員が参画できるような環境づくりができる人ということだろう。「明るい」というのもその環境づくりに欠かせない。一方で、「判断が速い」ということは「決断できる」ということで、その資質・能力を問われている。また、「誰とでも話ができる」には対教員だけではなく、子どもたちへの指導力、例えば、課題のある子どもたちに対してもいろんな引き出しで対応できることも大きな要因である。

自分をもってながらも、周りに目配せ、気配りができる人。若手（教員）が増えている中で、若手のこともちゃんと見えてる人。あまりガンガン行き過ぎず。そうすると、いい雰囲気です学年が回ると、学校全体もよくなっていく。（教員D）

普段の生徒との会話も自然だったり、最近の話もよくできる。話題も多岐にわたっている。（教員E）

どちらも中学校教員の語りであるが、学年団の連携の様子も感じ取れる。「ちゃんと見えてる」「あまりガンガン行き過ぎず」は、一人ひとりの教員が何をしているのか、どんなことに喜びや困難を感じているのかを把握していて、でも、ミドルリーダーの考えにはめ込んでしまうようなことはしない。すなわち、個々の教員を尊重すべきところは尊重するということである。また、ここでも若手教員の育成や継承が意識されていることが現れている。

③リーダーに必要なのは、おおらかさ、寛大さ、柔軟性、行動力

学校がうまく回って（動いて）いくために、校長に必要な資質・能力のことである。うまく回す（動かす）ミドルリーダーとそのタイプは重なる。校長にはより広く、大きくということである。

主任（等のミドルリーダー）のことをちゃんと見ていてくれるか。主任同士の連携のこともあるし、主任の困り感についても見ていてくれる人。これは教頭ですね。校長はいてもらうだけでいいんです。（教員D）

教頭はそれぞれのセクションのリーダー（ミドルリーダー）同士の連携がうまく進むように促す。校長はいるだけでいいとは言い得て妙である。校長は教頭との関係性、教頭とセクションリーダーとの関係性などを把握し、アドヴァイスや課題解決をおこなう。その動きは一般教

員からは見えにくい。むしろ大切なのは、校長は大きく構えていて、個々の事案へ直接的に細々と指示を出すようなことは「うまく回っていく」支障となるということである。

④理論を使うことは少ない

「学校で困ったときや新しいことに取り組むとき、どうしますか」というインタビューから導かれた答えである。1年間の大学院での学びを終えて、現在、週の3日を学校、残りの2日を大学院で学んでいる教職大学院生は一般の教員よりも「理論」の価値の認知度はかなり高いはずである。しかしながら、教職大学院で「理論」の価値に触れている教員であっても、理論にあたらぬという。これは少し意外であった。やはり教員の場合は、実践から得た実践知が優先される。

主幹や主任にきく。学術書や文献にはあたらない。やるならば、現場の実践のベンチマーキングを行う。その上で理論が足りないと感じたら、大学の教員をよんで話をうかがう。(教員A)
周りに聴く。授業実践や紙面にまとめるというときは書籍や先行実践例を読む。(教員E)

上記の2人のインタビュー内容からもまずは「実践(知)にあたる」ことを重視していることがわかる。このことによって、学校もうまく回っていくと認識しているようである。その上で、大学教員や先行実践例、書籍、すなわち理論にあたっていくことは興味深い。つまり、学校では理論が前面に出ることはできれば避けたいと考えているようである。「あの人は理論家ですからね」と半ば揶揄するような言い回しに学校の現状が表されているように思われる。

⑤理論と実践の往還・融合は、個人としてはあったとしても学校ではほぼない

このインタビュー内容についてはニュアンスの違いがあった。ただ共通していることは、学校の中で「理論と実践の往還・融合を感じる場面はない」ということである。学校では実践が重んじられ、実践の裏付けとなるような理論でさえも個人の中という範疇での往還・融合である。

学校では実践、実践できている。大学院に来て本を読んだり、講義で理論というものを学んだりしている。(教員C)
大学院に来るまでは理論と実践とか考えもしなかった。ここへ来て考えますが、それでもちよっとです。(教員D)
自分の中だけでいうと、めっちゃある。今年特に、現場(学校)へ戻って、これって授業でいっていたあの場面やなとか、理論やなと思うことが少なからずある。ただ、これまで知らなかっただけで、理論を学んだから気づけているといえる。理論を学んだからこそ、実践と理論をつなげることができる自分がある。今まではそんなこと考えなかった。(教員B)

しかしながら、大学院に来て学んだことで、大学院の長期実習や学校での勤務(実践)の中で理論的な裏付けと感じたり、理論と実践が往還・融合したりしていると思うことがあることから、教職大学院での学びは非常に有効であるといえる。

実践をしていると理論の裏付けを感じにくく、往還しているとは思えないが、発表会や研修では理論的な裏付けを話されるので、それを聴いて自分の実践を照らし合わせると往還したと思う。たまたま免許更新とかで、専門分野の新しい理論を習ったときに、今まで自分がやってきたことはこれだったのかと思ったときにはじめて往還したと思う。(教員E)

このインタビュー内容は大学院生ではなく、隣接県の現職教員によるものだが、実践と理論の関係やどんな場面でその往還が起こっているかということについての概念がはっきりしていて驚きでもあった。この教員の意識が特に高いというわけでもないとのことで、教職大学院での学びだけが理論と実践の往還・融合に有効であるとは言い切れない。

子どもの姿を見ていたら、ああ、これはあの本に書いてあったことだなと感じるとき(がある)。理論的にはこうだけど、実際の子どもは家庭環境などでそれぞれ違って、うまくあてはまら

ない。(教員C)

これは理論について学校でよくいわれるフレーズである。「理屈通りには進まない」ということである。往還しているわけではないが、理論と実践の関係について考える切り口である。また、このような言及もあった。

大学院で学んだ理論と現場の実践との往還についてはない。現場の中での理論と実践の往還はある。大学院で学んだ理論を現場で少しずつ実践することによって、少し具体化された理論ができていく。(教員A)

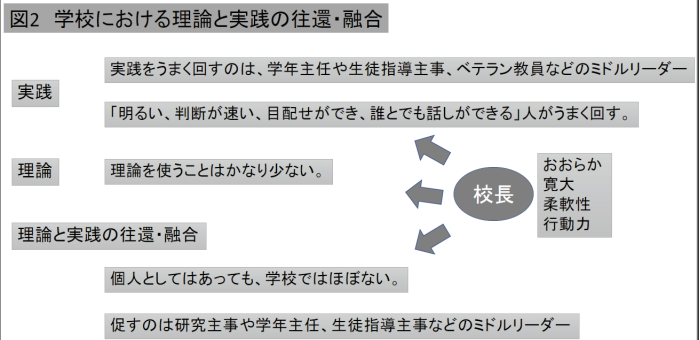
この人はこの理論と実践の往還・融合のところで、大学院で学んだ理論と現場(学校)における理論について言及していた。つまり、「理論」といわれるものには「理論」と「実践理論」とがあるということである。

⑥理論と実践の往還・融合を促すのは、研修主事や学年主任、生徒指導主事等のミドルリーダー

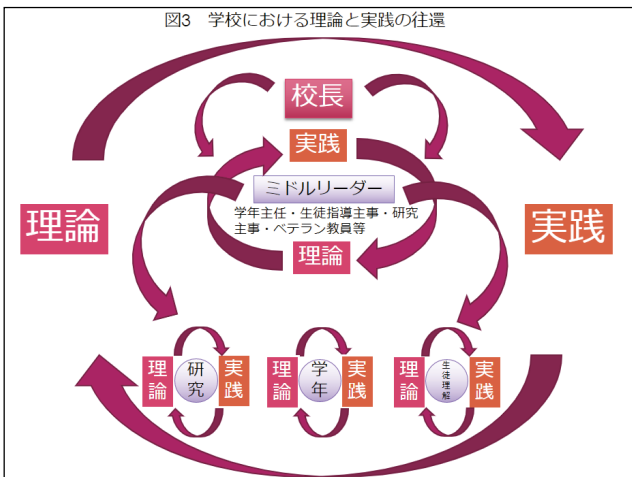
理論と実践の往還・融合は個人の中で起こっているということはわかった。しかし、学校の中でほとんど起こっていない。

研究を推進しているトップの人。こういうことやりますよとか、こういうことやりましたよとかの情報をくれることによって。それに基づいて周りの人が会話をしている「今日こんなことありました」とか「こんなことしたんだけど」とか。「ここは共同学習の側面があるよね」とかの会話が放課後とかにあると、刺激を受ける。(教員E)

学校の中で理論と実践が往還するには、実践がうまくまわるときのキーマン同様ミドルリーダーにかかっている。上記の語りは研究を推進するミドルリーダーが、実践を理論的に串刺ししているとか、価値付けしている。



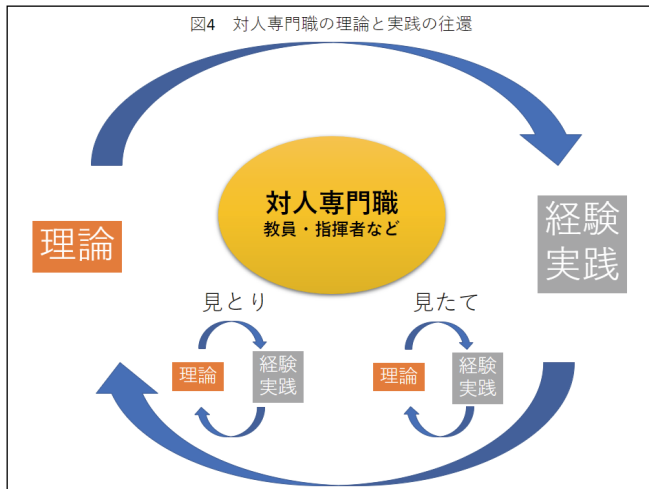
4-2 分類結果と考察



今回のインタビューでは、「教員の理論と実践の往還・融合」と「学校の理論と実践の往還・融合」、つまり、教員個人としての組織の理論と実践と教員が集まり組織している学校の理論と実践について明らかにした。《図3》のように、学校において実践と同様に理論と実践を往還させるのは教員の身近なところにいるミドルリーダーである。これは「教師としての成長に誰がもっとも有益であったか」という調査結果が第1位「同じ学年(教科)の教師」、第2位「同じ学校の同僚教師」、

第3位「同じ学校の校長・教頭」、第4位「近隣の学校の先輩教師」、第5位「指導主事」、第6位「大学教師」(佐藤 2009)と一致する。ミドルリーダーが実践による「経験知」と「理論知」の価値を踏まえて往還を促す。また、校長は教員からは見えにくい理論の価値を踏まえた上で、ミドルリーダーや学校全体で理論と実践の往還を促す。

4-3 考察



ここでは教員の理論と実践の往還とはどう
いうものなのか、実際にはどのようなになって
いるのかについて考察する。

対人専門職としての理論と実践

教員は対人専門職の代表的な一つである。
他に医師、カウンセラー、看護師、ソーシャ
ルワーカー、ケアワーカー、保育士などか
なり多くの職種にわたる。支援や援助が必要
な人と実際に関わる職種である。違う表現を
すると、人と接する「現場」がある職種とな
る。

例えば、臨床医師は患者を前にして、患者
の状況を把握し（見とり）、どのように治療

していくかを考え（見たて）る。その際、過去に出会ってきた患者の事例や研究誌や論文にあたって、見とり、見たてている。盛んに理論と実践の往還がなされている。他の例をとれば、演奏会という現場をもつ指揮者は限られたリハーサルに向けて演奏する楽曲の分析（アナリーゼ）をおこなう。演奏会やそのリハーサルは見えやすいが、実は指揮者がおこなっていることの8割近くが演奏会の「プログラムビルディング（演奏会のプログラムを組み立てること）」と「楽曲分析」などの下調べや準備である。楽曲分析をおこなうにあたっては、作曲理論、対位法、和声法、オーケストレーション、時代的背景など理論をもとに頭の中で音楽を組み立てていく。指揮者の岩城宏之は、「ぼくは何も作曲家のオリジナルの筆跡を、趣味的によるこんで見ているだけではない。演奏に行き詰まった時など、とにかく彼ら自身の歌やピアノを聴くことはできないのだから、その曲でなくとも、彼らの筆跡を長い時間、眺めてみる」（岩城 1983）と述べているのだが、これは数値化、記号化された楽譜やスコア（総譜）ではあるが、自筆譜を見ることでそこに作曲家の音楽に込めた「思い」を見とろうとしているのではないかと。つまり、数値化、記号化された「抽象」である楽譜を、演奏という「具体」のために、自筆譜という筆跡や筆圧や記入する上での癖などから「思い」を見とったり嗅ぎとったりしているのである。確かに、きれいに浄書され印刷された楽譜や、最近は当たり前になっているコンピュータソフトにより印刷された楽譜と自筆譜とは語りかけてくる音楽がまったく違うのである。この楽譜を読むという行為の中にも「理論と実践の往還」が見えるのである。ここまではまったく個人的な作業となるが、リハーサルや演奏会という現場に出てからは、頭の中につくった音楽の実現のために、オーケストラの状況、個々の演奏者の技量、セクションの技量などを見とり、見たてながら、楽譜という「抽象」を演奏という「具体」とするために「理論と実践の往還」をおこなっている。また、岩城はウィーンフィルを指揮した際の次のようなエピソードをあげている。「日曜日の朝、また（ウィーン・フィルのメンバーが）やって来た。土曜日よりずっと客席に老人が多いが、天気もよく、気持ちのいい朝だし、今度は昨日より心もち速くやってみろ、と言うのだ。ウィーン人、いやウィーン・フィルの音楽家たちは、こうやって音楽の現場の仕事をしているのか、と感心し、あきれもした。演奏というものに、そのときの天候、ホール大きさ、聴衆の入り具合や年齢層の種類が、これほど密接に関係あるものか。それを計算に入れて、よい演奏を提供している音楽家の集団の存在を、知ったのだ」（岩城 1983）これからは指揮者を含むウィーンフィルが高度な経験知を演奏に生かそうとし、「抽象」である楽譜をよりよい「具体」にするためのまさに対人専門職の「理論と実践の往還」の事例である。

教員もまったく同じである。現場という現実の中で個々の関係性を踏まえつつ、理論と実践を往還している。専門職、すなわち、プロフェッショナルには「理論と実践の往還」は不可欠である。

4-4 コミュニケーション能力とは何か

指揮者、作曲家としても大きな足跡を残したL. バーンスタインは「テクニックとはコミュニケーションのことだ。指揮者にとってこの二つは同義語なんだ」という言葉を残している。対人専門職にとってのコミュニケーション能力とは何か。

演出家、劇作家の平田は、「私たちが、『あの人は話がうまいな』『あの人の話は説得力があるな』と感じるの、実は冗長率が低い人に出会ったときではない。冗長率を時と場合によって操作している人こそが、コミュニケーション能力が高いとされるのだ」（平田 2012）と述べる。ことばという抽象化されたものを伝えるためには、冗長率という曖昧さを時と場合によって操作できることであるというのである。ことばという抽象化されたものは、例えば、詩や小説などは読む側が文字から入ってくる情報に想像力などを使って、その意味をつかんだり、その背景の情景や心情をつかみ取ったりする。これは前述の指揮者が楽譜を読むのと同じである。ムダやブレを削ぎ落とした「抽象」を「具体」にするには、ムダやブレを纏わせなければならないということである。1 人の人の中でこの作業が行われている時は「探求」や「苦悩」、「思索」で済んでいくのだが、人を介してこれを行うにはコミュニケーション能力がものをいう。平田がいう「冗長率を操作する」とは、ムダやブレをどの程度いれるとうまくいくのかを関係性やその場の雰囲気、伝える相手の状態などを「見とり」、どのようにすれば相手が受け容れられるのか、相手に届くのかを必死に「見たて」るのである。

4-5 エピソード

指導主事として多くの学校を訪問し、例えば授業改善を「指導」していた経験がある。学校の課題の改善や授業力向上のための指導をするのであるが、「指導する」という姿勢ではうまくいかないのである。正しいことをいえばそれで改善するならばこんな楽なことはないし、おそらく指導主事の仕事など必要なくなる。たとえ初対面であっても、瞬時に「見とり」「見たて」る。伝える相手が、「なるほど、やってみよう」という気持ちになる「相手に届くことば」を見つけ出すのである。何もこれはことばだけではあるまい。伝える側の雰囲気、表情、何を大切にしているかが伝わる言動など、もてる能力を総動員しているのだ。そこに平田のいう「冗長」も含まれる。指揮者も同じだ。オーケストラや合唱団を前にする時、どんな振る舞いをするか、第一声は何を話すのか、スコア（総譜）のどこからリハーサルを始めるのかなどをオーケストラや合唱団は興味津々待っているのである。ファーストコンタクトで指揮者とオーケストラの関係性や演奏の出来は決まってしまうともいわれる。専門家として高い専門性を持った集団のオーケストラである。例えば、「音をまちがって」しまった奏者にどのようにその音の間違いを伝えるかの問題なのである。50 人以上いる専門家集団の前で「恥をかかせる」ようなことをすれば、オーケストラ全体からの信頼は一気になくなってしまうのだ。また、リハーサル中に楽譜に書いてあるクレッシェンドを「そこはクレッシェンド！」とだけ言ってもそう大して効果は上がらない。命の宿った人の心に届くクレッシェンドにするためには、どのようにそれを伝えるかが大切である。イメージの共有である。伝え、伝わるためには受ける側のフィールドもワイドに拡がっていなければ伝わらない。そのためにことばも場も雰囲気も「ほぐす」のであり、ほぐすために伝え方だけではなく、「聴く」にも注力する。これは教員も含めた対人専門職すべてにいえることである。

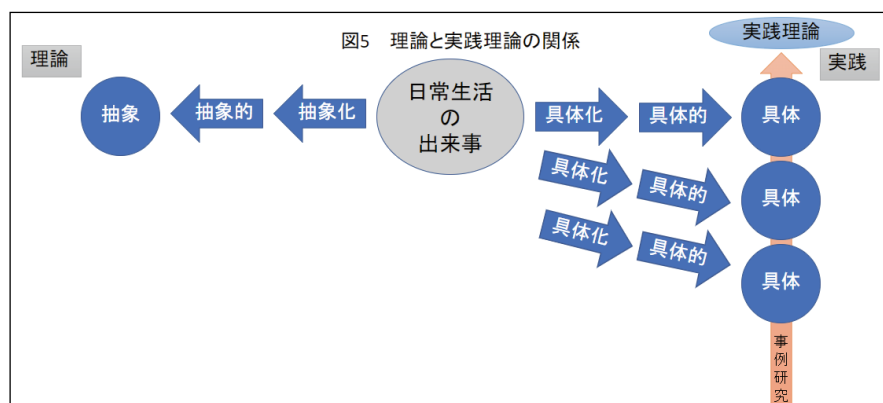
5 まとめとして

5-1 教師は学校で育つ

「専門家の学びは『経験』から学び、『経験』と『理論』を結びつけて『見識』を形成することにある。そのもっとも重要な基礎となるのが『事実』（経験と出来事）から学ぶことである」（佐藤 2009）
 ここでもう一度「医師はベッドの傍らで育つ」といわれるアメリカの言葉について考える。医師がベッドの傍らで育つのであれば、「教員は学校で育つ」のではなく、「教員は子どもの傍らで育つ」のではないか。すなわち、学校では当たり前語られている「子どもの姿から学ぶ」なのではなかろうか。つまり、子どもの姿を「見とる」ということではないのか。世界から自分を切り離して、研ぎ澄ましていく近代科学に対して、偶然によって成り立っている人が生きるということには科学的な裏付けがあるのかどうかもわからない。人間は自分や他者との関係性の中で生きている。「学ぶ」や「育つ」は人が生きることそのものである。「間違い」とか「これはだめ」ということはないのである。

5-2 ケーススタディ（事例研究）の必要性

インタビューの中で、教員は学校で経験や実践を積んではいるが、それが理論と結びついたり、理論と実践の関係性が非常に弱いこともわかった。また、何よりも経験を積み、実践を重ねることが重視され、理論が前面に出てきにくい学校文化があることもわかった。経験や実践で得たものを持論や固有理論でとどめてしまい、まるで武勇伝であるかのように扱われることがあるのは残念至極である。それらの共有がいかに大切である。



《図5》では「理論と実践理論」について図式化した。理論と実践理論とは同じ「理論」ということばがついているものの、それはかなり違っている。理論は「原因と結果」を追究し、人間から切り離れた「抽象」であり、「実践理論」は他者

との関係性を含んだ「具体」の「理由」を追究したものである。教員に限らず対人専門職は具体を事例研究し、追究することによって普遍性に立つことができるのである。つまり事例研究をする中で、「理論と実践の往還」はなされるのである。いや正確にいえば、「実践理論と実践の往還」そして、「実践理論と理論の融合」はなされるのである。そして、キッチリとした事例検討会議も必要であるし、普段の雑談の中で子どもの姿を話題にし、教員が互いに子どもの姿を出しあい、意見交換できる雰囲気醸成が大切である。

理論と実践の往還は個人の中でおこるのである。また、コミュニケーション力によって、組織や集団の中で、理論と実践の往還を促し、それを往還することができるのである。

引用および参考文献

- 岩城宏之（1983）．楽譜の風景，63，7-9，118，1-6，岩波新書
 大木裕子（2008）．オーケストラの経営学，東洋経済新報社

- 大津悦夫（2011）．教職大学院のカリキュラムについての検討 立正大学心理学研究所紀要第9号
- 金井壽宏（2005）．リーダーシップ入門，日経 BP
- 河合隼雄・鷺田清一（2010）．臨床とことば，朝日新聞出版
- 佐藤 学（2009）．教師花伝書－専門家として成長するために－，174，2 ，175，4-7， 188，14-16 小学館
- 瀬戸健一（2012）．省察力を高める実践テキスト－生徒指導のあり方を問う－，風間書房
- 瀬戸健一（2007）．生徒指導のための実践テキスト－教師の実践と理論の融合を目指して－，風間書房
- ドナルド・A・ショーン（2007）．省察的实践家とは何か プロフェッショナルの行為と思考 鳳書房
- 中寫 洋（2015）．初学者のための質的研究，53，11-15 医学書院
- 中村雄二郎（1992）．臨床の知とは何か，70，2-5，71，2-4 岩波新書
- 平田オリザ（2012）．わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か，109，9-11 講談社